

白バラ通信

No.19

明けましておめでとうございます。昨年は、尖閣列島をめぐる領土問題や、朝鮮半島での砲撃事件など日本近辺でも平和が脅かされる事件があり、沖縄は相変わらずの状態です。このような緊張感漂う今、憲法9条を守る運動もその力が試される時期に来ています。今年も皆様のご協力のもとに、神戸大学での活動を進めていきたいと思っております。どうぞよろしく。



T.A

講演会の案内 「いま、9条を世界にひろげています—コスタリカの青年弁護士ロベルト・サモラさんと語ろう—」

日本国憲法9条に深く感銘する彼は、いま、「軍隊のない国」コスタリカで米軍駐留を認めた法律を違憲として裁判に取り組んでいます。日本の平和運動をどのように見ているのか。コスタリカの平和憲法の現状はどうなのか。聞いてみませんか。

日時：1月19日（水）午後6時30分 会場：エル・おおさか708号室（500円）

共催：国法協関西支部・WSFおおさか連絡会・民法協国際交流委員会・兵庫県弁護士9条の会・9条の心ネットワーク（連絡先06-6966-9003）

◎ 第4回総会と講演会報告

11月16日に理学部Z棟で25名の参加で第4回総会が開催された。以下に掲載している「活動のまとめ」「運営方針」「共同代表・事務局体制」が拍手で承認された。

総会に先立って、「安保と沖縄」と題する講演会が開催された。報告は、

- ・和田進(人間発達環境学研究科)「沖縄・普天間基地問題の経緯」
- ・末本誠(人間発達環境学研究科)「基地建設を受け入れたシマの戦後」

の2本であった。和田報告は、年表に基づき、普天間基地問題の経緯を概観したものであった。末本報告は、白バラ通信18号に掲載されたものをもとに現地の写真を紹介しながら報告したものであった。

末本報告について活発な議論が展開された。(和田進)

I 第3回総会(2009.7.30)以後の活動のまとめ

1 白バラ通信の発行

- ・第14号(2009.9.24)
 - ・「世界の中の憲法九条—国際民主法律家協会ハノイ大会に参加して(五十嵐正博会員講演)を聞いて」(岡田順子)
 - ・「第3回総会開催される」(和田進)
 - ・「僕の『戦争体験』」(岡風呂賢)
- ・第15号(2009.10.17)
 - ・「改めて南京大虐殺を考える」の案内
報告 浦野俊夫さん「神戸・南京をむすぶ会訪中団に参加して」
 - ・「夏のテレビの戦争関連番組を見て」(影山純夫)
 - ・「不服従」(市成準一)
- ・第16号(2010.1.20)
 - ・「特別企画 ノーベル賞受賞者の講演会」の案内
 - ・「神戸・南京をむすぶ会訪中団に参加して」(浦野俊夫)
 - ・「2010年・憲法情勢」(和田進)
- ・第17号(2010.6.17)
 - ・益川敏英先生講演会の報告
 - ・益川先生講演内容(尼川大作)
 - ・会場アンケートから(感想など)
 - ・「4月25日・沖縄県民大会に参加して」(和田進)
- ・第18号(2010.10.4)
 - ・“安保と沖縄”講演会と第4回総会のご案内
 - ・「基地建設を受け入れたシマの戦後」(末本誠)
 - ・「もしも戦争になったら」(魚住和晃)



2 催し

- ① 2009.7.30 講演会と第3回総会…20名参加
五十嵐正博(国際協力研究科)「世界の中の第9条—国際民主法律家協会ハノイ大会に参加して—」
- ② 2009.11.27 改めて南京大虐殺を考える(灘区9条の会との共催)…25名参加
浦野俊夫(工学研究科)「神戸・南京をむすぶ会訪中団に参加して」
- ③ 2010.5.10 特別企画 ノーベル賞受賞者講演会(日本科学者会議兵庫支部神戸大学分会との共催)…500名参加
益川敏英(京都産業大学教授)「トップクォークの発見—学問の喜びと科学者の社会的責任—」

II 活動方針

- ① 白バラ通信の年4回の発行
- ② 年2回程度の講演会などの催し開催
- ③ 「灘区九条の会」など他団体との協力
- ④ 会費(年1000円)徴収の対策と会員の拡大
- ⑤ 事務局会議の月1回の開催

III 役員体制

- ◎共同代表 ・竹田真木生 ・魚住和晃

◎ 事務局	事務局長 和田進	尼川大作(白バラ通信編集)	市成準一(情宣)
	岡田順子(会計)	堺桂子(情宣)	浅野慎一
	岡風呂賢	影山純夫	西畑孝司
			安積教夫
			林文夫

年頭に思う

林 文夫 (神戸大学理学研究科)

皆さん、明けましておめでとうございます。年賀状には「今年も良い年でありますように」としたためましたが、私たちは果たして来年も無事に正月を迎えられるのでしょうか。正月の数の子や鯛の塩焼きを口にして思ったのは、近い将来こうした海の幸が無くなるのではないかという不安でした。2006年 Science 誌のある論文は海洋生物の多様性が指数関数的に減少していることを報じています。生物多様性が減ると外的揺動に対する海洋生態系の安定性や回復力が低下し、海洋資源が枯渇していくそうです。主な原因は温暖化の原因でもあるCO₂で、水に溶けやすく、海水を酸性化してしまうからです。このまま行くと、2048年には100%の分類群が消滅する計算になり、こうなる前に世界中の漁業はまったく不能になり、今まで楽しんでいたおせち料理も様変わりせざるを得なくなります。魚だけがおかしくなるとは考えられませんから、食料すべてに大きな影響がでるのは明らかです。日本学術会議も2009年に会長談話を発して海洋資源の枯渇を警告しています。こうした全地球的な異変や不都合はこの他にも、生物多様性の崩壊、異常気象、人口爆発、高齢化、核兵器と枚挙の暇が無く、心配の種はつきないわけです。

こうした全地球的な大問題を抱えているにも拘わらず、昨年暮れは焦臭いニュースが多かったですね。アメリカが日本経団連と呼応して我が国の「武器輸出3原則」の撤廃を迫ったかと思ったら、菅首相は「韓国で有事の際は邦人の安全確保のために『自衛隊』の派遣も考えたい。」と口走ったりと大変でした。何でこんなに重大な地球的危機の中に居るにも拘わらず、根本を解決しようとせず、内輪げんかに勝つための心配ばかりするのでしょうか。

ジェフリー・サックスの「Common Wealth」を読むと、2007年時点でのアメリカの軍事予算はその他諸国の軍事予算総額と同じくらいの巨額だということで、この半分を使えばアメリカ国内の貧困問題を解決できるそうです。しかしアメリカの軍産複合体はこの予算をそう簡単に手放すわけもなく、この軍事予算を他の軍事予算に転化させるために日本とミサイル共同開発をし、日本を含む諸国に売り込みたいというのが本音で、それが武器輸出3原則撤廃要求の真相のようです。

サックスの本によれば、国家間の戦争はここ数十年間に渡って低減傾向にあり、いまや「民衆の中の戦争」の時代になっていて、冷戦時代までと同じ軍事予算編成は陳腐化しているとのこと。国家間の陳腐化した戦争準備に金を掛けている場合じゃないという事です。ですから、オバマ政権の打ち出したグリーン・ニューディール政策、つまり、石油、原子力、軍事産業などの“grey job (灰色仕事)”から足を洗って、地球温暖化阻止に向けた戦時対応的な公共投資と産業再編成を行い、“green job (緑色仕事)”を作りだそうという政策に期待したいところですし、日本も急速にこの方向に舵を切る必要があると思います。

数の子に始まった年初の杞憂ですが、本当にここ5~6年で灰色から緑に産業構造を変えないと我々に未来は無いのではないのでしょうか。エネルギー政策も軍事政策も、これまでのやり方から脱却して「グリーン・ニューディール」スタイルや「憲法9条」スタイルの生き方に移行して、無駄なエネルギーを使わず、食料や富を公正に分配し、平和に徹する以外、生き残る道は無いことを強く訴えねばなりません。先進国のGNPの2.4%を使えば持続的発展が実現できると試算されていますから、実現不可能な夢では無いのです。こうした変革に際して、憲法9条が人類生き残りのための最も現実的なコンセプトであることをよりポジティブに提案していく必要があるように思います。

井上ひさしの棺を担ぎ、黙してそれでも前に進もう

竹田真木生（神戸大学農学研究科・教職員九条の会共同代表）

昨年、私たちは9条の会の世話人のひとり、井上ひさしを失った。小田実、加藤周一に続いて本当に大事な人が私たちを残し去って行った。小田は行動の人、加藤と井上は言葉を大事にし、私たちの大切な思いと志を上手に形にしてくれた。井上は文系の人なのに、広島におちた原爆、リトル・ボーイ(おちんちんの意-まったくバカにしている。品位も何もない。もっとも戦争の本質は人殺しで、そんなものに品位を期待するのは無理なのだが)の炸裂による、熱や、爆風や、放射能の効果について、データに基づいて具体的に、丁寧に、強く響く言葉で、読者の想像力の構築を手伝ってくれた(「軍縮地球市民」1-2号 2005)。この「想像力」とは、若き大江健三郎の評論にしばしばあらわれてきたものと同じものだ。冷戦時の核対峙の状況の中で、子供から大人まで世界の全ての個人あたり3トン分の高性能火薬が“わりあてられている”(結構な児童手当手だ)という計算結果を見せてくれている(前掲)。核兵器は数こそ当時に比べれば減っているが、より高性能になり、かつ、「次は米中衝突」の予兆のような不気味な序奏の唸りを立てている。アメリカでは、中国との衝突を睨んで、高性能爆撃機の予算がつくという。中国内陸まで核爆弾を運んで爆撃するのだという。現代の核戦争というのは、それこそフェンシングの試合のような決着のつき方に違いない。朝鮮戦争のころの時代認識ではないか。気がふれているのだとしか思われぬ。中国のほうでも国産スティルスの開発に成功したという。尖閣列島/釣魚島周辺の米中の動きも怪しいものになっている。アメリカが中国と核を投げあえば、日本列島はそれこそ火の海である。沖縄はそれこそ一瞬で蒸発してしまうだろう。なんとなく流される一片のニュースではない。さて、米中の核対峙にとって重要な位置を占めるのが、沖縄である。嘉手納の地下には核兵器が格納されていることは噂され、西山文書の実体が出てきて確認されている。ノーベル平和賞をとった、当時の日本の首相が、国民に嘘をついたことが明らかになった。國中騒然となるはずのニュースがなぜか、しれっと流れ、消えていく。沖縄の核兵器は、キューバ危機と同じ状況ではないか?キューバ危機状況がすでにあるなら、漁船の体当たりレベルの緊張ではないだろう。沖縄に核兵器を置いておくことは、日本の勝手、尖閣は中国の領土的野心という報道はおかしいのではないだろうか?この狂気を鎮め、おかしな愛国主義の絡み合った糸を、解きほぐしていくために、日本がやるべき道は何なのかを問わなければならないのに。今こそ9条の精神が東アジアの紛争解決にも力を発揮する時なのに。

普天間の移設についても約束したことが、簡単に覆され、首相が嘘をついてももう国民は怒りをも表明できなくなっているのだろうか?武器輸出や、医療隊の派遣など国の将来と憲法9条に緊密にかかわる出来事が、何の論議も呼び起こさずに始められるというのは、もう小泉の時代から定着した。テレビには初めから期待などしないが、こんな新聞ならばやめてしまえ、という怒りが首まででてる。

相変わらず、雇用条件がわるい。自殺者が増え、日本国憲法25条が定めた最低限の人間らしい生き方をできない人々の数が増えている。なぜこんな国になったのだろう。良い、ニュースはあまりない。しかし、一つだけはある。昨年五月の憲法改正のための施行法の実体が少しも動いていないことだ。いろいろな政治的なスキャンダルや行きがかりの問題が出てきたということもあるが、9条の「改正」を狙う勢力は、正面突破がかなり難しい状況であることを見たのだろう。9条の会がそれこそ細石が巖となるごとく、全国で澎はいとして沸き起こり、「これだけは何としても阻止する」と心に誓った人々が、それぞれにつながり、それぞれのやり方で、生活の周りから声を上げ始めたということに、支配層は危機感を感じたのだろう。支配層と御用化したジャーナリズムは今、民主党叩きを行い、そして彼らを自分たちの側に取り込もうとしている。彼らにとって、同じ仕事さえしていれば政党の名前などこだわらないだろう。これを、国民の側にひっぱるのか、マスコミの主導に沿って誘導された支持率の魔術によって民主党が変貌していくのかがしばらくの政治状況の焦点になるのだろう。井上の志を引き継ぎ、まともな人々がまともな生活を営んで幸せに生きるあたりまえの世の中をつくれるように、自分も何かしたいと新年にあたっての小さな決意を述べるしだいである。